

職員のひとりごと (HP 版)

No. 1 2020・2・10 (文責 渡辺 和明)



初めまして渡辺と申します。よろしくお願ひします。

私はNPO 法人ほぽらーとの理事の一人で、放課後等デイサービス (以下「放デイ」と表記) 「パワフルキッズ西保木間」の渡辺と申します。新しい年を迎え、このコラムの掲載を始めます。

五年前まで埼玉県の特別支援児学校の教員をしており、二十年前、三郷養護学校 (現特別支援学校) 勤務の折、「さとっこクラブ (現さとっこ) の設立に関わりました。その「さとっこ」が、NPO 法人ほぽらーとに吸収合併されたご縁で、今は当施設で働いています。以前から、ほぽらーとの職員研修にて「障がい理解」等について話す機会があり、現在は、自分なりの「障がい観」や「支援についての考え方」を「職員のひとりごと」という資料として職員向けに配布してきました。

そこで (あくまで個人的な考察、視点ですが)、ほんの少しでも (我がほぽらーとの職員を含めた) 福祉に関わる方々の参考になればと思い、ホームページにも「ひとりごと」を掲載していきます。



駐車場の車
(写真はイメージです)

さて特別支援学校に子どもたちを迎えに行くとなるとたくさんの車が玄関や校庭に並んでいて驚くばかりです。20年前に三郷特別支援学校の玄関に迎えに来る放デイ (当時は一般には障がい児学童と呼ばれていました) は一つだけでした。現在、放デイに子どもを通わせている保護者の多くは「放デイはあって当たり前」として捉えているのですが、放デイが爆発的に増えたのはここ7、8年のことです。ほんの20年前、埼玉県全体でも「さとっこ」以外に「障がい児学童」は数か所しかありませんでした。足立区でも同様です。

20年前、家庭と学校以外では自由に遊ぶ機会や活動する場が少なく障がいを持った子に、家庭と学校以外の「第三の場」を作り、子どもたちの活動場所を広げていくことが、当時の障がい児に関わる者（保護者や教員その他）の願いでした。

ですから、これだけ放デイが増えた現状は嬉しく思います。しかし、ただ増えたから良いという訳ではありません。我々の子どもの頃を思い出すと、学校が終わると、ランドセルを放り投げて、友だちと遊ぶ「地域」や「たまり場」がありました。無論、塾や習い事も含めて。そこでは親にも先生たちにも知らない「子どもの世界」があり、そこから学んだものが多かったと思います。

その意味では、「障がいを持つ子たちは目が離せない、心配だ」という親の気持ちは十分理解しつつ、どの子にとっても、学校と家庭以外に、より良き「第三の場」及び「子どもの世界」が広がってほしいと願います。



クリスマス・コンサート

そのためには、放デイが彼らにとって安心できる

「生活の場」になること、そして、子どもたちが

「通いたい空間」になること・・・

どの放デイもそういう存在になることを願って

います。そのためには・・・

これからも一緒に考えていきたいと思っています。